

夕焼け通り商店街

佐藤 利夫

夕焼け通り商店街は瀬戸内海に面した地方都市、高海市内の東方に位置するアーケードもないこぢんまりとした商店街である。

かつては小さい商店街ながらも道の両側にはずらりと商店が並び、買い物客もあふれていたものだが、現在では、ぼつり、ぼつりと店があるという程度の通り道になってしまった。しかし、地元の人はまだ昔のように、東は万代橋、そして西は昨日橋までの一本道を夕焼け通り商店街と呼んでいる。万代橋と昨日橋は十メートルにも満たないような小さな橋である。

小さく、それを嘆いてか一日中、狭い場所を行ったり来たりと同じ動作を繰り返したりしている。徳平の動きもその白くまに似ていた。そういえば風貌も動物園の白くまに似てなくもない。白い髪はふさふさしているが艶がなく、大柄でのっそりとしている。徳平の故郷はむろん北極などではなく、まさに今いるこの地なのであるが、こうして出たり入ったりを繰り返すのは、一ヶ月に一度位の割合で居ても立ってもいられない焦燥感に駆られるからだ。八百徳を閉めるか、それとも意地を張って続けていくか、徳平はずつと悩んでいる。

店には客がほとんど来ず、暇である。いや、暇などという言葉では言い表せない。開店休業状態が何年も続いている。正確に言えば何十年も続いている。

商店街の道はやつと車がすれ違うことができるほどの幅しかない。朝と夕方には商店街の狭い道を近くの小学校に通う児童が歩き、中学、高校生の自転車が行き交い、パート勤めのおばさんたちの原付バイクが通り、渋滞を避ける通勤の自動車の抜け道となっていて賑やかだ。しかしその時間帯が過ぎると商店街は途端にしーんとして、あたかも時代から取り残されたようななびしい雰囲気漂うのである。

商店街の中ほどにある八百屋の八百徳の店主、徳平は店を出て古い看板を見たり、店内の売り物の野菜を並べ替えたりする動作を繰り返していた。店を出たり入ったりする様は、まるで白くまのようであった。

大きな動物園には白くまがいるが、与えられている場所の面積は故郷の北極とは比べ物にならないくらいこの東西に延びている小さな夕焼け通り商店街にかつて存在していた商店の半分以上は、とつくに大家にテナントを明け渡し、明け渡されたテナントを継ぐ人物は現れず、店を取り壊されて普通の民家やパートが建った。いまに商売を続けている店のどれ一つとして景気のいい店はない。家賃を払う必要のない自前の店のみが残って細々と商っている。

徳平の二歳年下のかみさんは、「あんたはもう七十四歳。充分にええ年なんやから、もうええかげんにこんな流行らん店やこしやめてしもうたらどうな」と口うるさいし、少額とはいいながらも年金もらっている身であるので、閉店しても糊口はしのげると思う。だから赤字続きの店を閉めたくなることも度々あった。

しかし、もし店仕舞いしたら祖父が命に代えてまで守り抜いた伝統ある大切な看板を取り外さなくてはならない。

八百徳の看板はあめ色に変色し、一部が焼け焦げている古い檜の一枚板で、御年は徳平と同じ七十四歳だ。この看板を外すことに対して決心がつかない。

八百徳の数軒西隣りに栄屋という酒屋がある。その店主の栄治とは幼馴染みだ。共に太平洋戦争で父親を亡くし、戦後の母の苦勞を目の当たりにし、店を手伝える年頃になると、店を建て直し、商売を立て直す手伝いを必死でした。商売人として同じような体験を味わって苦勞を共にしてきた仲だ。だからその栄屋が店を続けている限りは自分もやめられないと思うのだ。酒屋の栄屋も八百徳に劣らないくらい客足は途絶

同居すれば家賃がただという特典があるからだ。その息子や妻たちが商売を手伝ったり、勤め人となったりしてこの商店街で暮らしているのだ。

さらに商店主の娘たちが大学生となり、同級生とでぢちやった結婚をし、他県で暮らしていたものの、数年で離婚して親元に子ども連れで戻って来たのが数人いるし、ほかにも様々な事情で母、あるいは祖母のみと暮らしている子どもたちがいる。

子どもたちの中でいつも徳平の店に寄ってくれる少年が二人いた。赤ん坊の時から知っている理容店の隼人と荒物屋の航平で、今年の春、二人は小学生になった。

隼人の家は母子家庭である。不運にも病気で両親と夫を次々に亡くした隼人の母親は一人で理容店を切

えている。しかし店を構えている限りにおいては互いの店を行き来して冷やかし、へたな冗談を言い、へぼ将棋のひとつもする。店を閉めてしまおうと今までのように気軽に行き来ができるだろうかと心配である。

徳平が店を閉めるのに踏み切れない理由はまだある。この夕焼け通り商店街はかつて徳平や栄屋の栄治が子どもの頃に通った梅島国民学校、今の梅島小学校へ抜ける通り道になっている。後輩にあたる小学生の朝夕の登下校の様子を眺めるのは楽しみでもあった。その楽しみをなくしたくない。この少子化の世の中に、夕焼け通り商店街には子どもたちが少なからず住んでいる。

かつてはリストラの嵐が吹き荒れ、一度出て行った息子たちが家族連れで親を頼って帰って来た。親子盛りにしている。航平はいえ、両親が離婚し、どちらも引き取りたがらなかつたので荒物屋をしている父方の祖母に育てられている。隼人の母親や航平の祖母の頑張りと思うと、徳平は負けておれんわい、という気持ちになる。

もし八百徳を閉めたら、そんな楽しみから切り離されてひとり孤独に取り残されてしまうだろう。かみさんは隣のクリーニング工場でパートをしているので留守だし、一日中テレビのお守りをするようになるのは目に見えている。黒い大きな自転車で青果市場まで出かけて野菜を仕入れることもなくなるので運動不足になってしまうだろうし、そうなればすぐに身体が硬くなってしまい、急に老い込むことになるに違いない。

しかし……と徳平は手を顎に当てて狭い店を眺めた。売れ残ってしまひびていく一方の野菜を見るのは八百屋としては何よりつらいし、商いは小さいといえども赤字は少々堪える。かみさんが言う通りに年も年だし、先の見込みは真つ暗だ。

八百徳を閉めるか、継続していくか、それが問題だと徳平は悩んでいる。

その時に、キューという自転車のブレーキ音が聞こえた。

「八百徳さん、どうしたんですか。お店を出たり入ったりして」

柔らかな声の主は隼人の母親だった。隼人の母はまだ三十代に入ったばかりで色白の美人だ。ママチャリから降りてスタンドを立てた。

この人もせめてご主人が癌で早死するようなことがなければ、夫婦二人で力を合わせていけたであろうが、孤軍奮闘している。その苦勞が目尻に少し滲んでいた。「お客がさっぱりこんで、わし一人でお店屋さんごっこや」

「どの店も苦しいですね。ウチも今までのやり方を変えて千円散髪というものにしようかと思っっているんです」

「おやおや、『千円散髪』とはいったいなんかいの？」
「今まではじっくりと時間をかけて髪を切つて髭をあたつていたんです。『丁寧』というのがウチのモットーだったんですけど、近頃の人は忙しいでしょ。安くスピーディなやり方の方がお客さんに歓迎されるのかな、と思い始めまして。かける時間を三分の一にし

て、料金も三分の一の千円にしてみましたらどうかなくて。
屋号も『山本理容店』から『ヘアサロン・ヤマモト』
っていうようにしやれてみようかと考えているんです。
で、改装費などのことを商工金庫さんに相談しよ
うと今から出かけるところなんです」

「あんたも苦労やの。せめてご主人が……。おっと
失礼」

悲しいことを思い出させてしまうようなことを言う
ところだった、と徳平は途中で口をつぐみ、あわて
て今聞いたばかりの新しいやり方の散髪することに
話題を切り替えた。

(以上1月23日放送分)